

Legacy Project Report

日本館 レガシープロジェクト レポート



Contents

目次

- 03 はじめに
- 04 日本館について
- 05 日本館レガシープロジェクトについて
- 06 Phase 1：日本館から大学生へ
- 07 1-1 バーチャル日本館体験
- 09 1-2 ホームミッション
- 14 1-3 海外パビリオン視察
- 16 1-4 日本館観覧
- 18 Phase 2：大学生から中学生へ
- 19 2-1 言語化ワークショップ
- 21 2-2 問い作りワークショップ
- 23 2-3 ジュニア世代ヘレクチャー
- 38 おわりに

付録：ワークシート（補助教材付き）

日本館を、 未来へのつなぎ目に

万博は、世界中の技術や文化、伝統が一堂に会する、地球規模の大きな行事です。それは、人類が積み重ねてきた知恵が集結する機会ともいえます。昨今、こういった知恵を次の世代へ受け継ぐ意味での「ソフトレガシー（見えない遺産）」のあり方が、注目されています。

2025年、大阪・関西万博で日本が出展した「日本館」では、「循環」をテーマに日本の思想や知恵が、建物からアテンダントのユニフォーム、展示物の細部に至るまで、丁寧に体現されました。この日本館の“循環の考え方”を、未来の世代にも伝えたい。そんな思いから、この「日本館レガシープロジェクト」がはじまりました。

プロジェクトのはじまりは、2020年の「日本館基本構想検討会議」にさかのぼります。コロナ禍で世界が不安に包まれる中、万博が少しでも希望の光になることを願い、当時の小中学生が万博を体験する5年後、現地で感じる「世界とのつながり」を力にできるようにという思いを込めて、「万博チルドレン」という言葉も生まれました。そして2025年、プロジェクトメンバーとなった大学生が実際に日本館を体験し、学びを次の世代である中学生へつなぐ授業を行ったことで、万博チルドレンによる、日本館のソフトレガシーのリレーが実現したのです。

プロジェクトを進める上で大切にしたのは、私たち一人ひとりが大きな「循環」の一部であると実感できるような学び方です。訪れた大学生が、受け手で終わるのではなく、中学生に伝える側にもなる。その過程で得る気づきこそ、文化や伝統が受け継がれてきた仕組みそのものです。能動的な体験によって、より理解を深め、自分ごととして考えていく機会となることを目指しました。

本レポートは、プロジェクトメンバーたちがたどった学びの旅の記録です。深い学びの軸となる行程「問い合わせ」については、広く共有できるようワークシートも作成しました。対話しながら使いやすい構成にしていますので、ぜひご活用ください。大阪・関西万博は、2030年からの未来に向か、SDGsの先を探究するための羅針盤となることを期待されたものです。皆さんにとって、この一冊が、「世界」や「循環」への探究を深めるきっかけになることを願っています。

塩瀬 隆之

日本館レガシープロジェクト ファシリテーター
京都大学総合博物館 准教授



日本館について

日本館とは

About

日本館は、他者と自分、人と人以外、生物と非生物など、さまざまなちといのちの「あいだ」(境界・差異・関係性)を見つめることで、いのちの尊さや、互いに支え合う存在であることを実感してもらうため、さまざまな取り組みを行いました。社会課題を「自分ごと」として捉え直す視点に、さらには未来社会の作り手として動き出すための変化の始点にしてもらいたい。日本館のテーマ「いのちと、いのちの、あいだに」には、未来へのそんな思いが込められています。

日本館のねらい

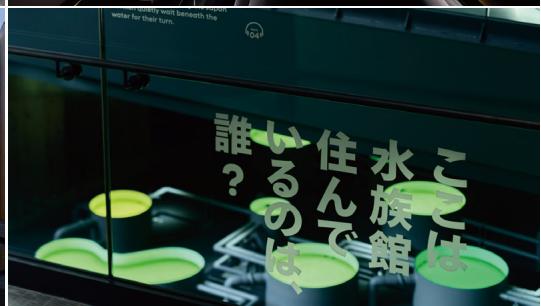
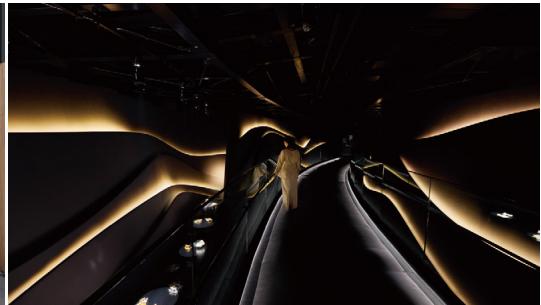
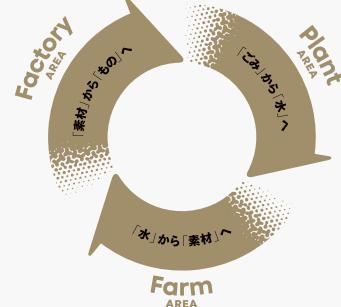
Purpose

日本館では、いのちそのものに立ち返り、自らの周辺にあるさまざまな「循環」に気づく機会を提供し、世代や国籍を問わず、すべての来館者に未来社会へのアクションを促しました。さらに、日本館の体験を経た人々、とりわけ子どもや若者をはじめとする「万博チルドレン」が、「いのち輝く未来社会のデザイン」をリードしていくきっかけとなることを目指しました。

展示体験

Experience

はじまりも終わりも存在しない「循環」を表す円環状の構造を持つ日本館。展示空間を構成するPlant・Farm・Factoryの3つのエリアでは、「ごみ」から「水」へ、「水」から「素材」へ、そして「素材」から「もの」へと、いのちが形を変えながらめぐっていく様子を、来館者は目の当たりにします。館内をぐるりと一周することで、文字通り「循環」を体感できる設計としました。さらに、実際に万博会場内で回収した生ごみをエネルギーへと再生するリアルな「循環」も実践しました。



日本館レガシープロジェクトについて

概要 Overview

日本館レガシープロジェクトは、日本館の理念から生まれたレガシーを次の世代へ継承していくことを目的としたプロジェクトです。プロジェクトメンバーは、大学生と中学生。日本館のテーマを出発点として、対話と共創を重ねながら、日本館のソフトレガシーをジュニア世代へつなぐアクションに取り組みました。

Phase 1

日本館から大学生へ

日本館のコンセプトは何か。どんな展示があり、そこでどんな体験をするのか。自分の中に落とし込んで理解を深められるよう、事前学習や他国との比較なども行い、さまざまな視点から日本館について学びます。

Program

- 1-1 バーチャル日本館体験 2025.8.6-8.7
- 1-2 ホームミッション 2025.8.8-8.26
- 1-3 海外パビリオン視察 2025.8.27-8.28
- 1-4 日本館観覧 2025.8.27-8.28

Phase 2

大学生から中学生へ

日本館のコンセプトや発信するメッセージを自分の言葉で捉え直し、中学生へソフトレガシーの継承を実践することで、他者へ伝えられるまでに理解を深めることにつながります。

Program

- 2-1 言語化ワークショップ 2025.8.27-8.28
- 2-2 問い作りワークショップ 2025.8.27-8.28
- ↓
(プラッシュアップ期間 2025.8.29-10.2)
- 2-3 中学生へのレクチャー 2025.10.3-10.16

4つのテーマ

4 Themes

学生たちは日本館の理念をより深く理解するために、展示内容から4つのテーマに基づいたグループに分かれ、それぞれA～Cのチーム単位で各ミッションに取り組みました。各チームはテーマに沿って調査や議論を重ね、自分たちなりの解釈や発信方法を考えながら、次世代へ伝えるための表現を探究します。

Theme

微生物 (発酵)



Mission

発酵ハンター

A / B チーム

Theme

循環



Mission

循環めぐり

A / B / C チーム

Theme

ごみ



Mission

もう一花咲かせま 選手権

A / B チーム

Theme

やわらかな ものづくり



Mission

やわらかの 知恵さがし

A / B / C チーム

ファシリテーター Facilitator



しお せ たか ゆき
塩瀬 隆之

京都大学総合博物館 准教授
日本館基本構想ワークショップ参画有識者

京都大学総合博物館 准教授。京都大学工学部精密工学科卒業。京都大学大学院工学研究科修了。機械学習による熟練技能伝承システムに関する研究で博士(工学)。経済産業省産業技術政策課 課長補佐(技術戦略)を経て2014年7月より京都大学総合博物館准教授に復職。NHK Eテレ「カガクノミカタ」番組制作委員。日本科学未来館“おや?”っこひろば総合監修者。平成29年文部科学省中央教育審議会委員(数理探究)、経済産業省産業構造審議会イノベーション小委員会委員・若手WG座長、文化庁文化審議会博物館部会委員、2025年大阪・関西万博政府日本館基本構想有識者ほか。平成29年度文部科学大臣表彰・科学技術賞(理解増進部門)ほか受賞多数。著書に『問い合わせのデザイン』(学芸出版社、2020)、『未来を変える偉人の言葉』(新星出版、2021)、『インクルーシブデザイン』(学芸出版社、2014)ほか。

Phase 1: 日本館から大学生へ

日本館はなぜ生まれ、何を伝えようとしているのか。
バーチャル体験から国際比較まで、
さまざまな視点から、日本館を理解する行程です。

-
- 1-1 バーチャル日本館体験** 2025.8.6-8.7
 - 1-2 ホームミッション** 2025.8.8-8.26
 - 1-3 海外パビリオン視察** 2025.8.27-8.28
 - 1-4 日本館観覧** 2025.8.27-8.28

1-1 バーチャル日本館体験

6-7 August, 2025

実施概要 Overview

プロジェクト始動の舞台は、オンライン上の「バーチャル万博」。万博にバーチャルの世界が作られたのは、2020年の日本館基本構想策定の時点ではコロナ禍であったことを背景に、時間と空間の制約を超えて参加できる、新たな時代の万博としての可能性も期待されたためです。学生たちは2025年8月6日・7日に「バーチャル日本館」に集合し、「循環」の当事者として藻類やごみになりきるなど、バーチャルだからこそコンテンツで、日本館が体現する「循環」の道のりを体感。そして、実際の日本館でのワークショップ（p.19「2-1」以降）に向けた予習として、事前課題の「ホームミッション」が発表されました。

ポイント・ねらい

- 日本館の展示体験の予習として、バーチャル空間で「循環」の流れを体感する
- 「循環」の「当事者」としての視点を体感し、主体的な学びを促す
- 「循環」の物語を体感して、「あいだ」で起きていることつながりを理解する
- 各自のミッションに対する興味や視点を育む



学生たちはバーチャル日本館に集合し、ファシリテーターの塩瀬先生とともに観覧



展示で取り上げられているごみや藻類の姿になることで、日本館の「循環」の輪を、「循環」の当事者となって体感しながら回ることができる



日本館の「循環」の仕組みをベースにしたミニゲームをエリアごとに体験。仲間たちと一緒にしながら展示のテーマへの理解を深めていく



観覧終了後は、次回のワークショップに向けた「ホームミッション」が塩瀬先生から発表され、4つのミッションからひとつずつチームに提出された



今後の予定と、プロジェクトの進め方などもバーチャル空間内で全員で確認。日本館の世界観の中で、プロジェクトの一員であると実感していく



最後に全員で集合写真を撮影。始動するプロジェクトへの興味や期待の高まりを全員で感じられる時間に

1-1 バーチャル日本館体験

6-7 August, 2025

参加者の声

Voices

万博の再現度の高さに驚いたのと同時に、日本館のテーマである「循環」の本質的な理解につながった。映像と説明を通じてコンセプトがクリアになり、「このメッセージを中学生に伝える」という自分の役割に対する期待感と責任感をふくらませることができた。

関西大学 Yさん

自分がごみになったり、藻になったりして循環を体験することはVR内でしかできない体験だと思う。また、ミニゲーム感覚で楽しみながら学ぶことができるため、万博への敷居が下がり、多くの人が楽しめると思った。

私は情報学部所属でメタバースについて学んだこともあるため、実際に体験したことで、VRの重要性や価値を感じた。

近畿大学 Mさん

コロナ禍という状況から生まれたあたらしい展示の形であり、距離や身体的制約に関係なく、誰もが万博を楽しめる万博らしい“デザイン”だと感じた。とくに、自分が“ごみの立場”になるという視点の転換を通して、循環社会の一員としての自分をより具体的に考えるきっかけになった。

グラフィックの美しさも印象的で、单なる情報提供にとどまらず、“体験を通して学ぶ”ということを身をもって体感できた。

関西大学 Kさん

印象的だったのが、自分がごみになった体験。このレベルで没入すると一気に内容の理解が増したことから、何かを伝えたい時に、一度、極端な手法を用いてみるのも効果的かもしれないということを学んだ。

関西大学 Uさん

コロナ禍の中で構想がはじまつたこと、会場に行かなくてもいいバーチャルアプリがあることを初めて知った。体調や距離の関係で現地に行けなかつた方々も多くいたと思うので、そうした人たちにももっと広まっていれば良かったと感じた。

「現地に行かなくても想いを届けられる」というこのアプリの技術の力に感動し、今後はこうしたデジタル技術をさまざまな分野で活用していきたいと思った。

関西大学 Kさん

バーチャル体験を通して「展示」や「伝える」という行為の可能性を大きく感じた。想像以上に多くの表現方法があり、情報を“分かりやすく”“自分ごととして捉えやすく”設計できることを実感しました。表現や発信のあり方に対する認識が大きく変わった。

関西大学 Yさん

バーチャルで表現する「循環」とは一体どのようなものなのかというのを見ることができた。「やわらかく作る」という言葉はなかなか難しいものではあると思うが、バーチャルだからこそ表現で分かりやすく表現されており、学びにつながった。

近畿大学 Tさん

今の時代、メタバースなどの仮想現実が注目されている中で、日本館に行ったような体験を、画面を通して、しかも会話もしながらできるという、まさにバーチャルの世界を身をもつて体験した。こんなに技術が進んでいるのかと感じた。

近畿大学 Kさん

1-2 ホームミッション

8-26 August, 2025

実施概要 Overview

ワークショップまでの期間(2025年8月8日～26日)、学生たちは1チーム4～6名に分かれ、4つのミッションのうち、それぞれ与えられた課題に取り組みました。「循環」や「やわらかなものづくり」など理解が難しいテーマもあるため、ミッションは正解を求めるより、「循環」への理解を深めるきっかけの役割を担い、自分ごととして考えられるよう、身近な内容をベースにデザインされています。『月刊日本館』(公式サイトに掲載)、自宅での資料調査、身の回りの事例観察などを参考にしながら、与えられたミッションへの理解を深め、自分なりの成果や新たな気づきを整理。ワークショップ当日に他チームに向けて発表し、さまざまな視点からの意見を通して、「循環」について理解を深められるようにしました。

ポイント・ねらい

- 自宅での調査を通して、「循環」を身近な日常の中に見いだす
- 個人の視点で得た気づきをチーム内で共有し、多様な考え方を育む
- 発表を通じて、他チームのテーマとのつながりや共通点を発見する
- ワークショップ当日の議論をより深めるための土台作りを行う

Mission A 発酵ハンター



ねらい

- 家庭の中で、「発酵」が身近であることを知る
- 微生物の力が身近な生活に役立っていることを実感する

Mission B 循環めぐり



ねらい

- 「循環」から連想するものを探す・考えることで、「循環」への感性を養う
- 「循環」の解釈や概念にさまざまな形があることを知る

Mission C もう一花咲かせま選手権



ねらい

- 「捨てる」と「捨てない」を考えることで、「ごみ」の定義が書き換わることを体験する
- 自分のアイデアを実践し、「捨てない」ことの価値を体験する

Mission D やわらかの知恵さがし



ねらい

- 循環型ものづくりは身近な場所やものにも息づくことを知る
- ものの背景や意図を通して、やわらかの知恵に宿るものづくりの考え方を知る

1-2 ホームミッション

8-26 August, 2025

Mission A 発酵ハンター

結果発表

Result



参加者の声

Voices

うま味、塩味、甘味、辛味、酸味の五味が複雑に合わさった味(調味料など)に、「醸造」や「発酵」がよく見られると気づいた。単なる甘味や塩味には、発酵の要素があまりない。ほかのチームの発表を通して、身の回りに多数の循環があると気づいた。

関西大学 Aさん

「発酵」「醸造」などのキーワードに着目して食品表記を見たのは初めてだったが、探すとサクサク見つかり、多くの食品に酵母などが使われていることを知った。中でも、調味料類などに多用されていた。おいしく料理を食べるための調味料に、これだけたくさん含まれているということは、私たちの日々の生活を豊かにするために欠かせないということだと感じた。

関西大学 Oさん

食べものの「味」にしか興味がなかったが、作られた過程を知ることで、別物だと思っていた食べものに意外な共通点があった。カビは汚いイメージしかなかったが、食べものをよりおいしくしてくれるし、自分たちの体の中に常に存在することをあらためて実感して、発酵という現象を身近に感じた。発酵は発酵で終わりではなく、循環しているのだなと思った。

関西大学 Kさん

「発酵」について、今まであまり気にしていなかったが、身近な存在であり、自分の食生活は発酵に支えられているのだなと感じた。とくに日本食を支える調味料である味噌や醤油だけでなく、外国の調味料にも使用されており、発酵は世界共通の技術だと感じた。

関西大学 Tさん

1-2 ホームミッション

8-26 August, 2025

Mission B 循環めぐり

結果発表

Result

対話

人と人との会話のラリー
言葉を受け取って、返す
の繰り返し



①アクアポニックス



水産養殖と水耕栽培を組み合わせた、
循環型の農業システムのこと

(基本の仕組み)

- 1.魚を育てる魚を水槽で飼育
- 2.魚は糞を食べてプランктンをする
- 3.水槽内にいる硝化細菌が、汚れを分解し栄養分に変える
- 4.栄養分を含んだ水が水耕栽培エリアに送られ、植物が育つ
- 5.植物は栄養を吸収すると同時に水をきれいにする
- 6.きれいになった水がまた水槽に戻る浄化された水が再び魚の水槽に戻り、
循環する

クジラの死骸

- ・クジラの排泄物は炭素が含まれており植物プランクトンが分解する。
- ・クジラが死亡すると海底へとゆっくり沈み、蓄積した二酸化炭素をそこへ貯蔵する
- ・捕鯨は気候変動に影響を与えるかね?



その他

- ・親と子と孫(次の世代への循環)
- ・人間が獲得してきた「知識」
- ・対話
(言葉を受け取って返すの繰り返し)
- ・換気
- ・衣類
- ・大学の教科書
- ・セカンドハンドの衣類
- ・豪華の循環
- ・子どもへの投資
- ・アクアポニックス
- ・コンタクトレンズケースのリサイクル
- など...

参加者の声

Voices

日常で循環の例を探すことは難しかったが、
人とのつながりや情報のめぐりなども循環で
あることを、ほかのメンバーから発見するこ
とができる。循環の解釈を広げることが大事だ
と感じた。

関西大学 Yさん

関西大学 Nさん

すべてのものごとや事象は循環と捉えられる。
生活しているだけでは気づかない発見がこう
いったイベントによるきっかけで見えてくる。
家の内部にもたくさんの循環がある。もの
リサイクル等以外にも現象・概念などもある。

近畿大学 Fさん

関西大学 Tさん

点と点をつなぐことは簡単だけれど、それを環
(輪)にすることは難しいと感じた。循環とご
みは、表裏一体なのかもしれない。

関西大学 Kさん

関西大学 Kさん

世の中は循環で動いていると感じた。例え
ば四季であったり、何かを生産し消費して、また
分解して利用したり。また、このプロジェクト
の学びを伝えるということも、後の世代でめぐ
らせるという意味での循環だと思った。

循環そのものを捉えるより、何が循環してい
るのかを考えるほうが重要かもしれない。物
体がそのままの形で循環するものと、生態系
のような大きな流れの中で循環するものとが
ある。

1-2 ホームミッション

8-26 August, 2025

Mission C もう一花咲かせま選手権

結果発表

Result



参加者の声

Voices

課題で発表した「飲みきった牛乳パックをまな板として使う」というのは、母がやっていることだが、母も祖母から教えてもらったことだと教えてくれた。前の世代から受け継がれてきている知恵が、意外とたくさんあるんだと思った。

関西大学 Sさん

アイデアによって捨てる前にもう一花咲かせることができる。重要なのは、考えること。

関西大学 Tさん

「再利用する」という意識を持てば、ごみも日常生活に役立てることができると気づいた。今はかわいらしいパッケージの商品が多くあるので、ブックカバーやボックスにするなどの再利用のしがいがあると思う。

関西大学 Sさん

もう一花咲かせられるものを家で見つけるのは難しかった。一人暮らしにはもともと少ない。ただ、調べてみるとライフハックのようなことがたくさんある。

関西大学 Kさん

使ったものを再利用することで、ひとつのものがもうひとつのものに進化し、それを私たちが使用していることがすごいことだと気づいた。「もう一花」として、いらないものを捨てる前に、これはまた何として使えるかを発想すると、ごみはごみではなくなり、環境にも良いのじゃないかと思った。

関西大学 Hさん

Mission D

やわらかの知恵さがし

結果発表

Result



ペットボトルが“柔らかい”ことで生まれる良い働き

- 押しやすさ（使用時の利便性）
- つぶしやすさ（リサイクル面）
- 軽量化によるエコ効果
- 安全性の向上

その他

- 障子
- 薬のカプセル
- プチブチ（緩衝材）
- 避難所
- オブラー
- 卵の殻
- 卵のパック
- 割り箸
- ヘルメット
- QRコード（無駄な部分をあえて作る）
- スマホなどのカバーガラス
- ペットボトルのキャップ
- 冷蔵庫の下のゴム
- 五重塔
- 公園のやわらかい地面
- トイレットペーパー
- 介護職・離乳食
- トカゲの尻尾切り
- 自動車のクラッシュアブル構造
- など…

参加者の声

Voices

身近にあるやわらかの知恵を**発表し合うこと**で、あたらしいやわらかの解釈を知ることができた。例えば、私は水に溶けるという点で「トイレットペーパー」を出したが、ある程度これでも利用可能な「QRコード」もやわらかいのではないか、と言っている方がいた。実在するものだけでなく、データや感情も循環に入ると知った。

近畿大学 Mさん

「スマホのガラスフィルム」は割れるかわりにスマホ自体の画面を守る、「ヘルメット」は衝撃を受けることで、中のやわらかい部分が変化して衝撃を吸収する。「やわらかさ」は、どんなところにも適応しやすい。物質的じやないところにもやわらかく、こわれやすく作られているものもある。

関西大学 Uさん

ペットボトルや冷蔵庫など身近にあるものでもやわらかの知恵が活かされている。ヘルメットや自家用車等、「自分の身を守る」という点において「やわらかさ」「かたさ」が活用されていると分かった。ただやわらかければいいのではなく、さらに未来へ活きるやわらかさを感じられた。

近畿大学 Tさん

やわらかの知恵は、日本文化の特徴と結びついているものがあると気づいた。ドアを開けやすくする冷蔵庫のゴム、公園のやわらかな地面などの具体的な例を通して、やわらかさには、身を守る、保存性や安全性を高めるなど、さまざまな面に対する効果があると感じた。

近畿大学 Kさん

1-3 海外パビリオン観覧

27–28 August, 2025

実施概要 Overview

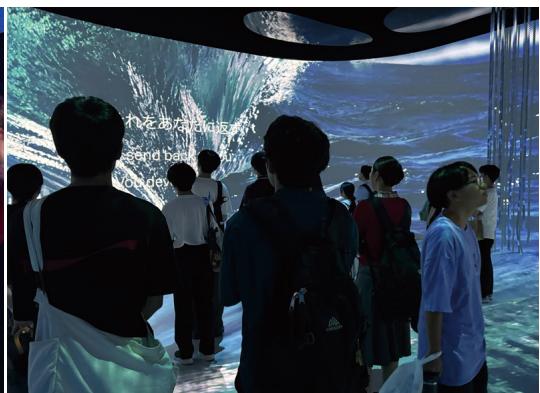
ワークショップ当日（2025年8月27日・28日）の朝、学生たちは「カタール館」と「ポルトガル館」を観覧しました。日本館を見る前に、海外の国々の視点や伝え方を比較材料として参考にするためです。観覧先には、「循環」に近いテーマのパビリオンではなく、あえて日本館と対比させやすい2館を選びました。カタール館は、多湿な日本とは正反対の乾燥した環境にある、中東の国のパビリオンです。ポルトガル館は、生命を育む資源としての「海」の物語をイマーシブ技術で演出し、日本館の静的な展示演出とは手法が対照的です。それぞれの国のアプローチと比較することで、日本館のメッセージの伝え方を、多角的に考えるきっかけとしました。

ポイント・ねらい

- 日本館と海外パビリオンの表現を比較し、相対的に理解する
- 「循環」の捉え方や表現の国際比較から、文化や価値観の違いを学ぶ
- 体験を通じて、抽象的なテーマを具体的に捉える力を養う
- 観察した内容を今後のワークショップや発表に活かす視点を持つ



カタール館を観覧。カタールの沿岸地域の歴史的・現代的な重要性をめぐる旅を、美しい石や立体的な写真を使って体感できる展示



ポルトガル館を観覧。「海洋：青の対話」をテーマに、生命を育む資源としての「海」を探求する、ユニークでインタラクティブなマルチメディア体験を共有



ふたつの海外パビリオンを観覧後は、次の日本館観覧に向けたイントロダクション、ホームミッションの振り返り、展示体験の予習などを行った

1-3 海外パビリオン観覧

27-28 August, 2025

参加者の声

Voices

ポルトガル館では「ごみを捨てるならごみ返すよ」というような映像が印象に残っている。自然がやり返すという、人間と自然の間に敵対とまでは言わないが壁がある見せ方。日本館における「循環」は、自然と共存すること。もちろん日本も自然災害で被害があるけれど、海外では「自然から守る」、日本館では「共存する」技術を見せていると感じた。

関西大学 Tさん 

ほかのパビリオンでは、全部「こうです」と説明してくれる展示で、分かりやすい楽しさがあった。日本館の場合は、見せてはくれるが、ちょっと“もや”がある。その“もや”が気になって、興味を引き出すような仕掛けがたくさんあった。言葉づかいや見せ方もすごく印象的だった。

関西大学 Nさん 

海、地球、環境というテーマも、国や地域によってものの見方が違うなど感じた。カタール、ポルトガル、日本とパビリオンのメッセージが全然違う。日本では、自然は征服するものではなく共存するもの。その術は日本の文化なのだと思った。その一方で、環境問題や、人間と地球の関わり方、いのちの関わり方という根元にある視点は一緒だというのが、すごく印象的だった。

関西大学 Oさん 

海外のパビリオンは展示品の説明が多い一方、日本館は未来にどうやって活かせるか、微生物の働き方など、学べることが多い。また、あたらしいものだけではなくて、今まで大切にしてきたもの、守ってきたものも紹介しているのが、海外パビリオンとの違いだったかなと思った。

関西大学 Mさん 

海外館が最新技術を出してくるのに対し、日本館はもっと深いところで、日本の良さ、しさを出していると感じた。もっと最新技術を出すこともできただろうけれど、そこが日本館の、自分が好きなところだなと思った。

関西大学 Kさん 

どの国も資源を大切にしていく、とくに水資源のテーマで展開されているが、日本では、発酵の菌や微生物も資源なのだとと思った。

また、「循環型社会」といえば自然分野に重きが置かれたものだと思っていたが、日本館で式年遷宮を見て、「文化」を後の世代につないでいくという形の循環型社会もあるんだと驚いた。あたらしい発見だった。

関西大学 Kさん 

海外のパビリオンは、「自分たちの国」にどんな背景があるのかを伝えてくる印象があった。対して日本は、日本らしさはあるけれど、国を押し出すより「循環」というテーマを扱っているなというのが印象的だった。

関西大学 Tさん 

どのパビリオンもSDGsや地球環境に関わる点は同じだと思ったが、ポルトガル館は「そろそろ自分たちの行いに気づこうよ」というネガティブ寄りの警告的な強さがあり、日本館は「こういう技術があって、こういうことができるからもっと知ってよ」というポジティブな切り口だと感じた。

関西大学 Yさん 

実施概要 Overview

実際に日本館を観覧し、「いのちと、いのちの、あいだに」そして「循環」というテーマがどのように表現されているかを体感しました。事前にバーチャル日本館やホームミッションで得た知識も踏まえつつ、塩瀬先生や関係機関の職員による解説を直接受けながら館内をめぐり、展示の意図や仕組みを確認。各エリアでの「循環」の流れ、微生物の役割、ものづくりの知恵などを自分の目で観察することで、新たな発見や学びを得ました。

ポイント・ねらい

- 日本館のコンセプトが具体的にどう表現されているか体感する
- 事前学習で得た知識を展示体験と照らし合わせ、理解を確認・深化させる
- 各エリアの展示を観察し、具体的な「循環」の流れについて理解する
- 展示体験から得た気づきを整理し、新たな学びや発表に活かす視点を養う



日本館の検討や運営に関わってきた人々からの生の解説を聞き、自分の目で見ることで、事前の知識が、深い納得感を持って理解できたとの声が多数上がった。体験で育まれたそれぞれの視点が、Phase 2に向けた「自分で考える」プロセスの軸になっていく。

1-4 日本館観覧

27–28 August, 2025

参加者の声

Voices

「ごみや藻さえ美しい」と感じさせる展示を通じ、資源やもの、すべてに大切な役割があるという新たな価値観を得た。また、資源の活用と空間の繊細さから、「もったいない」精神が3Rを超えた循環の本質だと理解を深めた。ワークショップを通じ、循環に対する多様な視点とそれを中学生に伝えるためのアプローチを習得できた。

関西大学 Yさん

日本館を構想された日本の大人の皆さんがあい世代に伝えたいこと、世界に伝えたいことに触れることができた。実際に働かれていたスタッフの方々の制服が循環を意識して作られていたのが、構想止まりではなく実際に使用できるところまで落とし込まれていて面白かった。

立命館大学 Mさん

建物から展示構成まで、あらゆるものでテーマの循環を表現していて、感銘を受けた。砂時計のようなものを三度通るようになっていて、まるでぐるぐると同じところを回っているかのような感覚に陥った。映像もつながっていると説明を聞き、驚嘆した。バーチャルの日本館を体験した後だったので、比べながら館内を回れたのも楽しかった。やわらかさについての展示は、バーチャルで見聞きした内容が至るところにあり、気分が高まった。

関西大学 Oさん

SDGsとか循環型社会とか、正直うるさいなって思っていた。日本館の展示を見ていると、うるさいとか良いこととか抜きにして、すごくロマンがあるなと感じた。見ていて楽しく、そういうふうに楽しむことに循環型社会を実現するヒントがあるんじゃないか、と思えて良かった。

関西大学 Sさん

自分が藻になったりごみになったりという、バーチャル日本館での体験をした後に実際に日本館を観覧すると、バーチャルほど体験型ではないが「自分が体験したごみや藻はあいつかな」と感じながら見ることができた。バーチャルとリアルがつながり、「実際はこうなんだ」という視点によって理解が深まると感じる。

関西大学 Kさん

日本館について経済産業省の方と回ることができ、日本館で伝えたい部分や裏事情などのさまざまことを教えていただき、質問にも丁寧に答えていただいたので、とても楽しく勉強になった。また、細かい部分に目を向けたり、別の視点で見たりすることで、また違った体験ができると感じた。

近畿大学 Kさん

事前学習で、ごみの再利用方法として自分が考えていたのはお菓子の袋をカゴにしたり、牛乳パックを貯金箱にしたりと、結構小規模なものだったのだが、実際、日本館で見たのは、ごみを微生物が分解して、水などに分解して、その水が藻を育てて…と大規模な再利用方法というか「循環」が見られた。すごく面白かった。

関西大学 Sさん

チームで日本館を観覧して考えたのが、みんなで意見を出し合うのも「やわらかの知恵」なのではないかということ。一人の意見だけでは答えは出ないため、相手の意見を一回バウンドさせて自分の腑に落とし、自分の意見をまた出す。その過程も「循環」の一部なのではないかと思った。すごく良いチームで、正解のない分野だからこそ、自分のやわらかさを感じられた。

立命館大学 Fさん

Phase 2: 大学生から中学生へ

Phase 1の体験から受け止めた日本館のメッセージを
自分の言葉で捉え直し、中学生へ継承する。
その行程は、大学生自身の理解を
より深めることにもつながります。

-
- 2-1 言語化ワークショップ** 2025.8.27-8.28
 - 2-2 問い作りワークショップ** 2025.8.27-8.28
 - ↓ 〈ブラッシュアップ期間 2025.8.29-10.2〉
 - 2-3 ジュニア世代ヘレクチャー** 2025.10.3-10.16

2-1 言語化ワークショップ

27–28 August, 2025

実施概要
Overview

Phase 1で得た学びをもとに、学生たちはチームごとに担当するミッションのキーワードについて議論を行いました。まず、一人ひとりが日本館の展示や体験を通して感じたことを、自分の言葉に置き換えます。その言葉をチームで議論し、キーワードごとに定義を明確化。知識をかみ砕き、大学生からさらに次の世代に向けて自分の言葉で説明できるまでに理解を深めました。

ポイント・ねらい

- ・チーム内で議論を重ねて、各チームで考えや気づきをまとめる
 - ・自分の言葉で表現できるまで、理解を定着させる
 - ・他者に説明できるレベルまで考えを整理する
 - ・チームの意見を統合し、ひとつの定義や解釈を作り上げる



日本館を観覧し、事前にバーチャル日本館で得た「循環」への知識を、実際に体感してさらに深く理解した学生たち。そこで塩瀬先生から「日本館のキーワード・テーマを深掘りし、自分の言葉で説明する」という課題が投げかけられ、各チームでグループワークを行った

③気づいたことをもとにホームミッションのキーワードを自分で自分の言葉で言い換えてください。

参考答案 とは、
ごみをゴルにせよ、いいたといのちを、整ぐ技。
ごみをゴルにせず、いいたといのちを、整ぐ技。
あいた

各チームでキーワードの言い換えについて話し合ってまとめてください。

参考答案 とは、ごみをゴルにせよ、いいたといのちのあいたを整ぐ技。

〈発酵〉グループのワークシートの例。「『発酵』とは、ごみをゴールにせず、いのちと、いのちの、あいだを繋ぐ技」

「もう一花」グループのワークシートの例。「『もう一花咲かせる』とは、循環させられないと思い込んでいるもの、1つ目の役割が終わったものに対して、見方を変え、2つ目の役割を考え、新たな「いのち」を吹き込んであげること」

〈循環〉グループのワークシートの例。「『循環』とは、破壊と想像を繰り返しながら、素材を適材適所に活かして他の輪とも深く関わっていること」

〈やわらか〉グループのワークシートの例。「『やわらかいものづくり』とは、長い循環を成立させるために短い“死”を与えること」

2-1 言語化ワークショップ

27–28 August, 2025

参加者の声

Voices

最初は「循環」がテーマの日本館になぜ「発酵」があるのだろうと思っていた。チーム内で「発酵」が何かという意見を出し合っているとき、この人にとっての発酵は終わりにあるもので、この人ははじまりに発酵がある話だなと気づき、「もしかして循環してる?」と自分の中でつながった。チームで言語化する議論を経て、日本館に「発酵」がある意味に納得した。

関西大学 Kさん

このプログラムのように、インプットしたものをおかの人に向けてアウトプットしていくこと自体が「循環」なのかなと感じた。**知識を自分だけのものにするんじゃなくて、伝えていくことでどんどん発展していくと、輪が丸くなっていくんじゃないかな**と思った。

関西大学 Yさん

「循環」というとちょっと難しいかもしれないの、「つながり」と簡略にすると伝わりやすいかなと考えた。時間的なつながりもそうだし、ごみの次の使い方もつながり。そんな「つながり」を意識しながら、循環の意味をもっと分かってもらえるような伝え方をしてみたいと思った。

関西大学 Yさん

以前日本館に来たときは他人ごとだと思っていた見ている自分がいたが、人に教えることが前提の今回は、自分ごととして捉えることができた。「やわらかく作る」「こわれやすく作る」という、まだ日本語としてそれ専用の言葉がない抽象的なものを言語化して、自分の中に落とし込む作業が一番難しかった。考え続けることが「循環」なのかなと思った。

近畿大学 Uさん

このわくわくは、現地に行かないと分からぬ部分もあるし、一回行けば分かるかと言わいたらそうでもない。関西圏に住んでいても現地で体験していない中学生はたくさんいると思い、その子たちにどういうふうに伝えたらいいのかというのも、強く感じた。

関西大学 Tさん

普段循環を目にして、「循環」という単語で切り取って見ていないので、**日常に転がっている循環をあたらしく発見できた**なと思う。また、**自分は受け取るばかりだったと気づいた**。このプロジェクトは中学生に教えるという目標で進んでいて、他人に伝える機会が少ない自分には難しいことだけれど、これをチャンスに中学生たちに良いものを届けられるようにならねばならないと思った。

近畿大学大学院 Fさん

「循環」という言葉を聞いてあまりイメージが湧かず、自分の言葉にすることも難しかったが、日本館を見て回ってから、はじまりも終わりもないということは、「ひとつあるものがなくなることで、別のものが生まれて、繰り返すこと」なのだという具体的なイメージを持つことができた。

関西大学 Sさん

チームがとても良く、アイデアがどんどん出て、お互いに進化させ合えた。以前はSDGsなども「我慢しなくちゃいけない」ことのような難しいイメージを持っていたけれど、今回知恵やアイデアを出し合う中で、むしろ楽しいことだと感じた。ワークショップの作業は簡単ではなかったけれど楽しくて、こんなふうに出し合っていくことで発展が進んでいくんだ、課題解決ってこういうことなんだと実感した。

関西大学 Yさん

2-2 問い作りワークショップ

27-28 August, 2025

実施概要 Overview

自分の言葉に置き換えた後、担当ミッションに関わる「問い合わせ」を作成しました。この「問い合わせ」は、中学生向けレクチャーの柱となる重要な要素です。中学生が日本館に興味を持ち、テーマについて思わず考え出してしまうような言葉や伝え方を工夫。とくに、万博閉幕直前の実施であるため、中学生の多くは直接来館できない可能性が高いこと、レクチャーの場が生活空間ではなく教室であることを前提に、声かけひとつにも、中学生たちが自分の生活と結びつけやすい語彙にする必要があります。相手の目線に立って、言葉を選んで問い合わせを作るプロセスを通して、大学生自身にとっても、「循環」への理解と、学びを深めるきっかけを生み出すことを目指しました。

ポイント・ねらい

- 日本館を体験していない人にも分かりやすく伝えるために言葉の精度を高める
- 中学生が興味を持ち、思わず自分から考え出したくなる問い合わせを考える
- 主体的な学びを促すための伝え方や表現方法を工夫する
- 問い合わせを通して、大学生自身の「循環」の理解も深める



メンバー同士でアイデアを出し合ながら、授業で使う問い合わせに取り組んだ。「日本館を体験していないかもしれない」「循環に興味がない」「年代が違う」など、授業をする相手の中学生の目線に立って、どう工夫すれば日本館のメッセージを継承できるのかを意識しながら議論を重ね、難航する面もありつつ全チームが問い合わせを完成させた

問い合わせ 火星でも発酵はあるの? 解説 発酵って何? なぜ発酵? なぜ世界の食卓?	問い合わせ 発酵って何? なぜ発酵? 解説 発酵って何? なぜ発酵?	問い合わせ 発酵って何? なぜ自分に返ってくる? 解説 発酵って何? なぜ自分に返ってくる?	問い合わせ 発酵って何? なぜ自分に返ってくる? 解説 発酵って何? なぜ自分に返ってくる?

〈発酵〉グループのワークシートの例。「火星でも発酵はあるの?」「発酵がない世界の食卓とは?」

問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?

〈循環〉グループのワークシートの例。「循環はいずれ自分に返ってくる?」「本当に循環っていないといけない?」

問い合わせ ゴミは悪者か? 解説 ゴミっていい? 僕がゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い?	問い合わせ ゴミは悪者か? 解説 ゴミっていい? 僕がゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い? ゴミっていい? ゴミって悪い?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?

〈もう一花〉グループのワークシートの例。「ゴミは悪者か?」「ゴミたちは自分たちのことをゴミだと思っていますか?」

問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?	問い合わせ 物が死ぬ時っていつ? 解説 死ぬって何? なぜ死ぬ?

〈やわらか〉グループのワークシートの例。「物が死ぬときっていつ?」「“やわらかい”ものと“すぐ壊れる”ものの違いは?」

2-2 問い作りワークショップ

27-28 August, 2025

参加者の声

Voices

答えありきの問い合わせるよりは、自分自身の中でも答えがないのに問い合わせるのは難しかった。まず言語化のパートで定義などを考えてから、とにかく問い合わせを10個立ててみる進め方をした。初めは手が動かなかつたが、最後には、日本館を体験していない中学生にも「発酵」を考えもらえるような問い合わせをみんなで作れたと感じられたのが良かった。

関西大学 Kさん

「循環」という言葉の意味を深く考えた。どうしたことなのか、なぜ必要なのかなど概念をうまく説明することが難しいなと感じた。ただチームの4人で問い合わせをどんどん出して話し合ううち、循環は回って終わるという平面的なものではなく、後世に繰り返し、受け継いでいくこともあると思い、とても良い気づきになった。

関西大学 Nさん

日本館を体験していない中学生にどのように教えたら伝わるのかを考えるのが難しかった。**抽象的になってしまって難しいし、逆に具体的だと端的になりすぎてしまい伝えたい部分が表面しか伝わらない**。そこの調節を通して、伝えることの本当の難しさを学んだ。**今まで関わってくださった先生や大学の教授に感謝を感じる。**

近畿大学 Kさん

ものごとに出会ったとき、**奇想天外でもいいから自分自身で問い合わせることの意味**を感じた。この機会がなければ「みんな言ってるから『循環』は必要じゃん」で終わっていたと思う。情報があふれるネット社会では、全く考えずに生きてしまいがちだが、**クエスチョンを作り続けることで考え方を直せる**。そんな「問い合わせ」自体の大切さも伝えたいと思った。

関西大学 Iさん

与えられた問い合わせるよりも、問い合わせるほうが難しいと感じた。ぶつ飛びすぎて的外れになるとその問い合わせの意味がなくなる。だからといって「これが答えだ」という正解があるわけではなく、**問い合わせによって導きたい方向性を探る作業のバランスが難しかった**。

関西大学 Kさん

一度自分が体験した内容を、中学生への問い合わせに向けてあらためて整理し直す過程で、テーマをさらに深く自分ごととして考えることができた。**学んだことを「教える」立場に立つことで、理解の質が大きく高まった**と感じる。

関西大学 Yさん

「循環型社会」という言葉には全く興味がなかったが、考えるきっかけになった。問い合わせるとき、ごみの視点に立ってみると、意見をメンバーがしてくれ、**自分の発想とは全然違っていてすごく面白く感じた**。

関西大学 Kさん

日本館の体験を経て、世の中にはやわらかなものが存在し、こういう理由でこう作られているというのをまず「**知る**」のが大切だと思った。それは、中学生たちが、これからあたらしいものを作ったり、こうしたらいいよねという案を出したりするのにも大事なこと。**教えてあげたいし、一緒に考えたい**と思った。

近畿大学 Mさん

日本館観覧で、やわらかく作っているものが比較的身の回りのサイズのものが多いなと感じたが、**ワークショップまで経て、例えばもっと大きな家や、駅をあっちこっち移動できるまちなど、空想的ではあるが大きな規模のやわらかいものを作れないかなど考えが広がった**。

大阪大学 Tさん

実施概要 Overview

各チームは事前に作成した「問い合わせ」を軸にプラッシュアップ期間で日本館の学びをさらに深め、その上で、中学生向けにプレゼンテーションを行いました。資料作りにも日本館に関係するスタッフはできるだけ手を出さず、大学生だけで挑んでもらう場を目指しました。まずは日本館のテーマや展示体験を紹介。そして、自分たちが理解を深めてきたそれぞれのテーマについての解釈を発表し、「問い合わせ」を投げかけました。レクチャーを通して中学生との対話の場をオンラインで教室に作り出し、循環型社会への考えを一緒に深めるとともに、「循環」をテーマに作られた日本館の、理念やメッセージの継承を目指しました。

ポイント・ねらい

- 大学生がインプットした知識を次の世代にアウトプットすることで理解の定着を図る
- 大学生自身にも先入観や思考の偏りが生まれてしまうことを、中学生との対話を通して自覚する
- 中学生の素朴な反応や疑問から、大学生にとっても新たな気づきや学びを得る
- 若年層に日本館のソフトレガシーを継承する際に適した表現や語彙を、より具体化する

Group 1

発酵

Aチームは石川県のかほく市立河北台中学校の2年生クラス、Bチームは長野県の立科町立立科中学校1年生クラスへ授業を実施。ホームミッションのパートでは「発酵ハンター」の課題を取り組んだ「発酵」の事例を紹介し、中学生にもなじみのある身近なイメージを糸口に、「循環」の問い合わせを行った。

ねらい

- 身近な例と問い合わせを使って「発酵」とは何かと一緒に考える
- 日本に根づく文化や考え方を「発酵」を通して学ぶ
- 「循環」の視点を持って「発酵」のあたらしい解釈を広げる

Group 2

循環

Aチームは石川県のかほく市立河北台中学校の2年生クラス、Bチームは兵庫県の西宮市立浜脇中学校の2年生クラス、Cチームは大阪府の利晶学園大阪立命館中学校の1年生クラスへ授業を実施。ホームミッション「循環めぐり」をもとに、自分たちの言葉とアイデアで導いた「循環」の解釈を紹介し、あたらしい気づきから授業を展開した。

ねらい

- 今後の生活の中にも続く「循環」についての新たな発見や考えを生む
- 「循環」という概念を自分の言葉で伝えられるようになる
- 日本人が受け継いできた考え方と、それを引き継いでいく大切さを伝える

Group 3

もう一花（ごみ）

Aチームは石川県のかほく市立河北台中学校の2年生クラス、Bチームは長野県の立科町立授業を実施。中学生にもなじみ立科中学校の1・2年生クラスへのある「ごみ」を、あえて「いつからごみになるのか」など定義から問い合わせ、ホームミッション「もう一花咲かせま選手権」でのアイデアも共有しながら未来への積極的なアクションも呼びかけた。

ねらい

- 再利用のアイデアと一緒に考え、「ごみ」とは何か考えてもらう
- 「循環」の視点から、「ごみ」をいのちの一部であると理解してもらう
- 人間の考え方次第で「ごみ」は「ごみ」でなくなることを伝える

Group 4

やわらかなものづくり

Aチームは石川県のかほく市立河北台中学校の2年生クラス、Bチームは兵庫県の西宮市立浜脇中学校の2年生クラス、Cチームは大阪府の利晶学園大阪立命館中学校の1年生クラスへ授業を実施。身近なものに宿る「やわらかの知恵」の例を分かりやすく多数紹介し、逆転の発想を楽しみながら、背景にある文化と思想、「循環」とのつながりが自然に理解できる授業を展開した。

ねらい

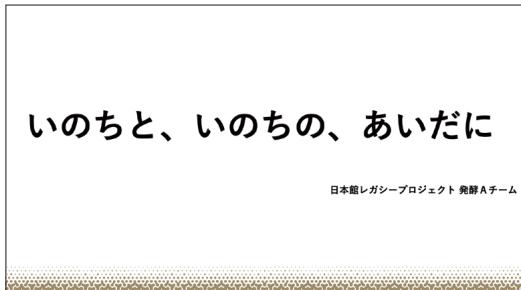
- 日本に伝わるやわらかなものづくりの工夫の背景を知る
- 身近にある「やわらかの知恵」と一緒に考える
- 「こわれる」が終わりや無ではなく、「循環」の一部だと理解してもらう

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

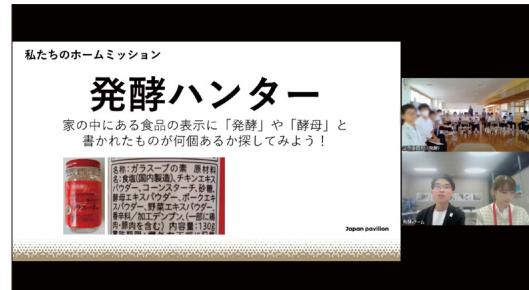
3-16 October, 2025

Group 1 発酵A 「いのちと、いのちの、あいだに」

レクチャー内容 Lecture



日本館のテーマと同じものを授業のテーマに掲げてスタート



ホームミッションのテーマや集めた成果を通して、身近な「発酵」の多さを実感してもらった



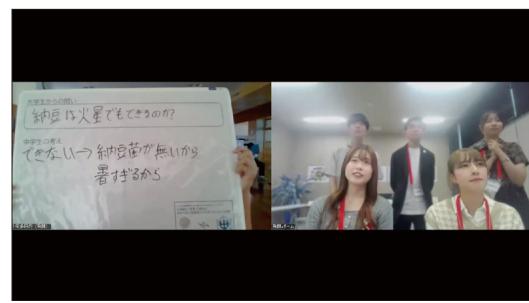
「発酵」の種類や、生活での利用法を並べた上で、その本質をそれぞれ考える時間を設定



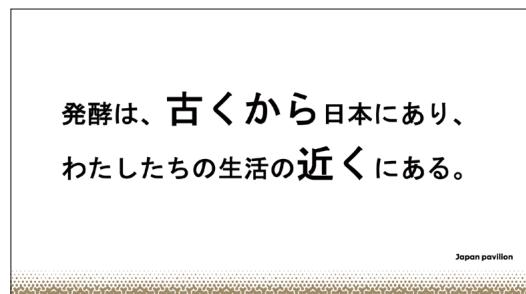
「発酵」について興味が湧いたところで、「つい考えてみたくなる」問い合わせを投げかけた



中学生たちは、提示されたヒントなどを参考にしながら各班でグループワーク



各班が考えた答えを代表者が発表。さまざまな考えが積極的に出された



「発酵」とは何か、大学生自身も日本館で得た気づきを共有し、授業を終了



最後に生徒から授業の感想や今後取り組んでみたいことなどが伝えられた

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 1 発酵B 「発酵から考える循環」

レクチャー内容 Lecture



事前リハーサルを丁寧に行い、本番はスムーズな進行と楽しい雰囲気作りを工夫



それぞれが考へてきた伝え方の工夫を意識しながらコミュニケーションを図る

発酵から考える循環

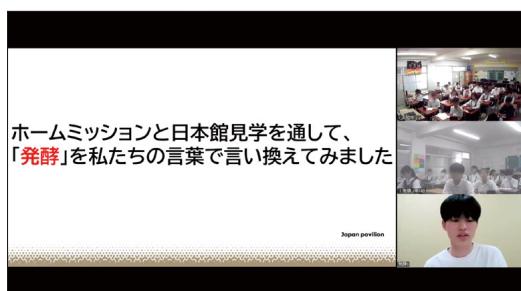
食品などで身近なイメージのある「発酵」を、「循環」を考えるキーワードとした

ミッション成果報告

カップラーメンにも！

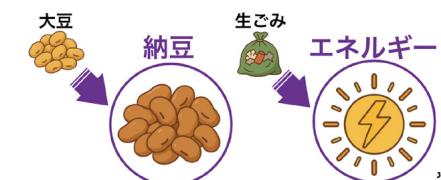


「発酵」のイメージのない食品にも含まれていることなど、意外な気づきも紹介



「言語化」のセッションで考へた言葉を紹介することで、「発酵」の解釈を拡大

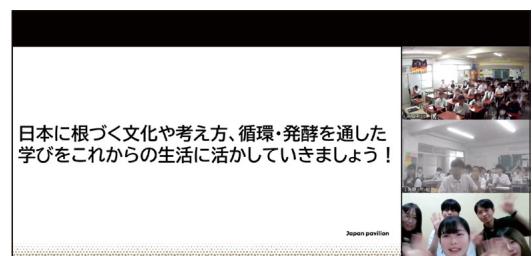
発酵とは
人にも自然にもやさしい万能な技術



言葉を紹介する際は、スムーズに理解できるよう図解や解説の構成など伝え方にも工夫



「なかったら？」という想像を通して、生活の中の「発酵」の必要性を体感できる時間に



身近な「発酵」の大切さを考えることで「循環」を自分ごとに感じてもらった

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 1

発酵

大学生の声

Voices

予想以上に真剣に聞いてくれたり、積極的に質問してくれたりしたことが印象的だった。

「発酵って身近なんだ」と気づいてくれた瞬間が見えて、準備してきたことが伝わったと感じた。授業後に塩瀬先生から「あなたたちが話した内容を中学生が反芻していた。それが理解しているということだよ」とお言葉をいただき、自信にもつながった。

関西大学 Kさん

中学生に分かりやすい言葉を用いて説明や問いかけ、フィードバックを行えたのが良かった点。反省点は、もう少し画像資料を加えて、より日本館をイメージしやすくすれば良かったということ。頭で理解した概念を、限られた時間で分かりやすく伝える難しさ、また立場が異なる人に伝える工夫を学ぶことができた。

関西大学 Aさん

中学生たちの反応やコメントも取り込みながら授業ができたと思う。「火星で納豆は作れるか?」という問い合わせを出したが、その問い合わせに対する問い合わせもできたら、さらに良かったと思う。

関西大学 Kさん

もっと分かりやすく伝えられたのではないかという反省点も多いが、中学生たちが活発に意見交換をして、自分では気づかなかつた視点での意見もあり、驚かされると同時に興味深かった。少しでも「発酵」に興味を持っていてくれたらうれしい。毎日の食卓で、スーパーの買い物で、友達との会話でふとしたときに思い出してくれたら良いなと思った。

関西大学 Oさん

中学生の声

Voices

「発酵」はとても身近なものだけれど、実はよく知らない、と感じた。納豆は火星でできるかどうかを考えることが、面白かった。日本だけでなく、海外ではどのように発酵が使われているのかがとても気になったので調べようと思う。

「いのちと、いのちの、あいだに」というテーマについて、最初は意味が分からなかったけれど、話を聞いてよく分かった。「発酵」と「腐る」は見た目も違うのかなど、自分で実験してみたいと思った。

「発酵」が想像していたよりも身近にあることや、「循環」にも深く関係しているのだということを知ることができた。古くからある「発酵」の技術を、これから環境のためにも使えるのかなと、期待を持つことができた。

「火星で納豆は作れるか」という質問をチームで考えたが、納豆菌が生きられる条件や、酸素や水分があるかどうかなどを話し合うのは面白かった。大学生の説明が分かりやすく、「発酵」が身近な食品だけでなく、宇宙ともつながるのだと感じた。普段食べている発酵食品も、もっと大切に味わいたいと思った。

とても分かりやすく、学んだことを家族に話したりして、広めていきたい。またいろいろなことを教えてほしい。

「発酵」は食事以外のイメージがなかったが、ごみなどを発酵させて使い方などを変えられることを初めて知ることができた。

「発酵」と「腐敗」の違いや、身近な発酵食品などをたくさん調べてみたいと思った。また、循環型社会を作るための具体例なども知りたいと思った。今回の授業を通して、日本館の発想や技術に興味がわいた。

ごみから水、水から素材、素材からものという流れがすごいと思った。また、発酵食品から酵母を見つけたりしたいと思った。自分でも納豆を作ってみたい。

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 2 循環A「循環Aチーム」

レクチャー内容 Lecture



「循環」に興味を持ってもらう糸口として、あまり知られていない循環システム「アクアポニックス」を紹介



同じ万博パビリオンのスペイン館などでの海洋ごみの再利用例を紹介。海洋ごみ問題を解決する「循環」の役割へも興味を広げた

メンバーの体験談から、バングラデシュにかつて日本が行った親切によって、現代の自分が思いやりを受けたことを「循環」として取り上げた



複数の事例から、ホームミッションを経て整理した自分たちなりの「循環」を丁寧に伝えた

次は中学生にも自分なりの解釈を考えてもう問い合わせを投げかけ、班ごとに議論してもらった



先生との関わりや、その学校ならではの取り組みの中に「循環」を見つけるなど活発な議論が生まれた

中学生から大学生に聞いてみたいことがやりとりされるなど、交流の機会にもなった

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 2 循環B 「日本館レガシープロジェクトB班」

レクチャー内容 Lecture

今日のめあて

日本館が伝えたかった大切な概念〇〇について
クラスメイトとのディスカッションを通じて、
自分の言葉で伝えられるようになる！



「循環」の字を伏せておき、「説明を聞きながら考えてみて」と謎をかける仕掛けでスタート



謎かけを受けた生徒たちはヒントを探しながら、日本館の説明パートを興味深く眺める



日本館の説明パートを終えてから「循環」を説明し、さらにその意味が展開していく流れに



ホームミッションのパートは、一緒に考える対話型に。「生命」「経済」などこの時点から積極的な意見が出た

では！ここでみなさんにクイズです！ ダンボールの回収率は何%だろう？？



- 1. 40%
- 2. 60%
- 3. 80%
- 4. 90%

Japan pavilion

要所でクイズを挟むなど飽きさせないよう工夫。答えはしっかり解説しテンポ良く進行

問い合わせパート

循環は必要なのか？



問い合わせは、グループディスカッションの後に発表。まずはそれぞれの視点で答えやすい問い合わせを投げかけた

問い合わせパート

私たちはどのように循環に参加できる だろうか？



問い合わせはふたつ設定し、「循環」について、必要性とアクションのふたつの面から考え方を深めてもらった



まとめとして、家に帰って話すなど学びを広めてもらうのも「循環」と伝えて締めくくった

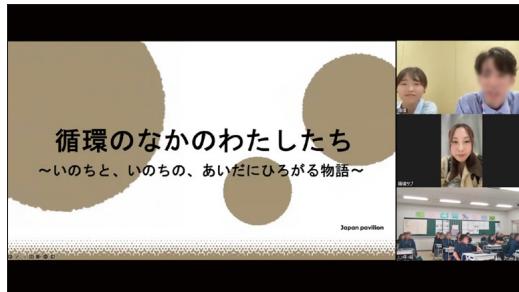
2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 2

循環 C 「循環のなかのわたしたち～いのちと、いのちの、あいだにひろがる物語～」

レクチャー内容 Lecture



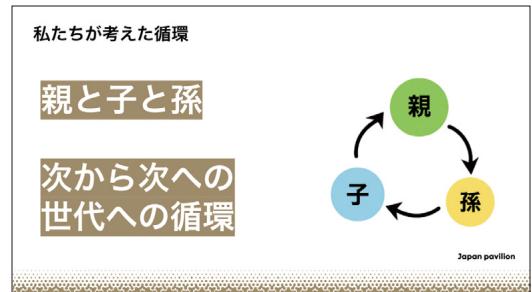
Cチームは、授業のコンセプトや流れを明快にし、日本館の世界観も感じられる授業を行った



アニメーションや写真的なレイアウトも練り、視覚的な表現でも飽きさせないよう工夫



まず、「循環」と一緒に考えることから対話をスタート。中学生が持つイメージも発表してもらった



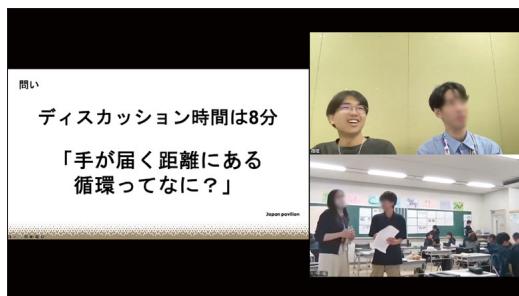
チームで考えた「循環」の解釈をいくつか説明。世代や知識など、あえて無形の例を中心紹介



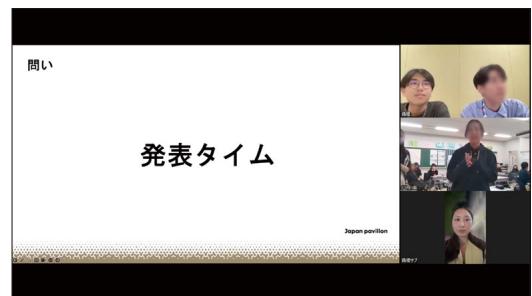
チーム発の「循環」の解釈も踏まえて再び中学生たちに問い合わせ直し、考えを自然に練りていけるよう進めた



ひとつの指針として、チームで言語化した「循環」のあり方を糸口に、さまざま循環があることを伝えた



問い合わせは、身近なケースで自分ごととして感じてもらえるよう「手が届く距離」と表現



「親切」「食物連鎖」など多様な答えが出た。この気づきを生活に活かし、引き継いでほしいという思いを伝えた

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 2 循環

大学生の声

Voices

基本的には伝わりやすい話し方でできたかなと思う。私たちが考えもしなかった意見がたくさん出てきて、もう少し難しい話をしても分かってもらえていたかもしれないという手ごたえがあり、単純じゃない複雑な話を入れてみても良かったなと感じた。ものの循環ももちろん大切だが、心の循環を意識して、育つていってほしいと思った。

関西大学 Yさん

少し難しい問い合わせてしまったが、それがかえって回答を多様なものにしたと思う。それがとても良かった。授業の中にひとつでも興味を引くものがあれば、突き詰めてもらえたと思う。専門的なことを学ぶ大学生との交流は、興味を突き詰める姿を見るができるのも利点だと思うので、いつか私たちの姿を思い出してくれればうれしい。

関西大学 Sさん

すべての班の意見を聞くことができなかったので、もっとさまざまな意見に触れられたらより良かったと感じた。中学生の皆さんには、特別なことよりも、小さな良いこと（ごみの分別や、人にやさしくするなど）を社会に還元しようという気持ちを持ってもらえたと思う。

関西大学 Iさん

反応を見ながら進行や問い合わせ方を工夫し、グループワークの時間配分なども雰囲気に合わせて最適化に努めた。工夫次第で、学びの深さが大きく変わることを実感した。すべてを終えてみて、このプロジェクトの意義を感じた。中学生の皆さんには、未来にアクションを起こすきっかけにしてほしい。

関西大学 Yさん

中学生の声

Voices

「循環」はものだけじゃなく、「思い」にもあると初めて知った。身近なところにも循環があると分かったので、自分でも探してみたいし、自分にできることを精一杯がんばりたいと思った。

「アクアポニックス」というもので魚と植物が循環していたことを初めて知った。これからの社会でも、何かと何かが循環することで、今よりもっと豊かな社会を作り上げができるのではないかと思った。

今まで、「循環」については何も知らなかった。今回のお話を聞いて循環についてよく分かった。とくに水を通したエネルギー循環、資源の循環、思いやりの循環がとても印象に残った。これからは自分で考えた循環を、習慣づけられるようにしたい。

初めて日本館のことを知り、「循環」というテーマを知りました。世の中にはさまざまな循環があることが分かつて、体の循環や、身近な循環があることに感謝しなければならないなと感じた。また、言葉の意味をしっかり深掘りして考えられる良い時間になった。ごみとか何かに循環できないかなって考え続けていこうと思う。

日本館や大学生の皆さん伝えたかった思いが伝わり、とても印象的だった。また、これからを生きる僕たちにとって何が必要で、どんなことをしたら世界を豊かなまま維持できるかなど、未来へつながることも考えられた。自分も、使い終わったものの活用など、環境について考えていきたいと思った。初めて気づいたこと、もつと知りたいなと思うことがたくさんあったので、忘れないようにしたい。

万博に行ったことはないが、行った気持ちになれた。グループで話すときになかなか良い案が思い浮かばず、あまり意見が出せなかっただけれど、もっとごみなどに 관심を持ち、SDGsに貢献していきたいと思った。すぐごみにするのではなく、「これに使えるな」と思ったら行動に移して、自分の生活に役立ててみたい。

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 3 もう一花 A 「『もう一花咲かせる』とは？」

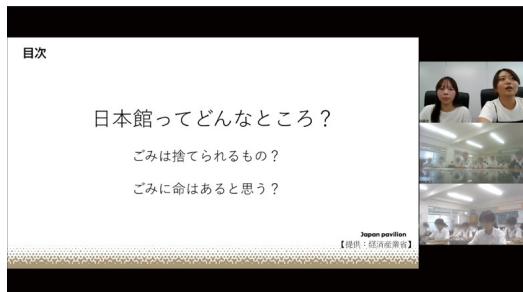
レクチャー内容 Lecture



Aチームは二人一緒に進行する形で、掛け合いのように楽しい雰囲気作りを行った



各授業には塩瀬先生も立ち会い、アドバイスやフィードバックを行って大学生たちの学びを深めた



最初から「ごみ」というキーワードを軸に、日本館の各エリアを紹介する流れで構成



日本館の各エリアにおける「ごみ」の関わり方を、クイズ形式も交えながら紹介した



「ごみ」の現状のイメージをまず思い描いてもらった上で、それを問い合わせ直す流れで気づきを促した



ホームミッションは3ジャンルに分けて事例を紹介した上で、「やってみたいもの」に投票してもらう構成に



問いは考えやすいよう3ステップで投げかけ。「ごみ」の定義には、それぞれの視点で多彩な意見が上がった



「ごみ」かどうかは自分次第であり、「循環」をつなぐには「考えること」自体が大切だと伝えて締めくくった

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 3

もう一花B 「モノの終わりは 未来の始まり?」

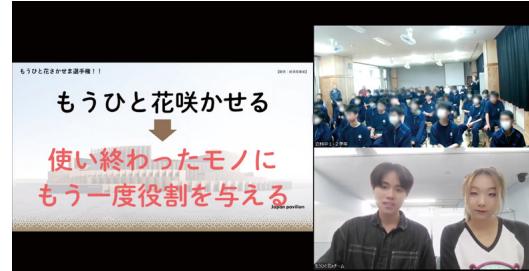
レクチャー内容
Lecture



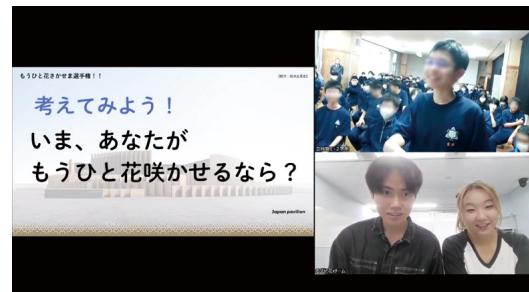
Bチームは、「ごみ」を「使い終えたもの」ではなく「変わり続けるいのちの一部」として授業を行った



事前に取り組んだホームミッションの成果を、具体例として分かりやすく紹介



チームのテーマ紹介を通して、「ごみ」はそれで終わりではないという考え方をまず提起



ここで中学生たちからも「もう一花」アイデアを募集。大学生たちが感心する案も飛び出した



自分たちで考えてもらった上で、「ごみはいのちの一部」という考え方を再確認してもらう流れに



問い合わせパートは、ものが「ごみ」となる境目は人の考え方にあることを感じさせられるよう、スライドの流れも工夫



中学生たちからの回答では、ただ捨てるという自分の行動を見直したいといった声が上がった



授業自体も、終わりでなくはじまりを意識した締めくくりに。授業後は活発な質疑応答も行われた

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 3 もう一花（ごみ）

大学生の声

Voices

伝えることの責任を実感する機会になった。身の回りのものを「ごみ」として捨てる前に、「もう一度別の役割を与えないか」と一步立ち止まって考えてもらえたと思う。授業をきっかけに、環境問題を遠い話ではなく、自分の生活と結びついた課題として捉えたらうれしい。

関西大学 Yさん

少し問い合わせを出すステップの情報量が多くなってしまったので、丁寧に問い合わせに向き合ってもらうためには改善すべき点かなと思う。中学生にどう伝えるかを一番気をつけていたので、自分たちが考えてもらいたいことを伝えられたのは良かった。

関西大学 Kさん

オンライン授業だからこそできること・できなきことをもう少しリサーチしておけばより良かったが、しっかり準備をしていたため、二人で役割分担をしながらやり切ることができた。中学生の方々にとって「もう一花咲かせられないかな?」と考えるきっかけになればと思う。

関西大学 Tさん

中学生の声

Voices

ごみになるものは「人がごみと決めつけてしまうもの」なので、ごみの見方を変えていきたいと思った。大学生の皆さんが話していたように、自分も、ごみになったものをまた新たななものに変えてみたりしたい。

「どのようなものがごみなのか」という質問になかなか答えられなかった。それは普段自分が当たり前にものを捨てているからだと気づかされた。最近よく耳にする「持続可能な社会」は、自分たちで実現していくことなのだと再認識することができた。

ごみは、ほかにもいろいろな使い方があり、まだ使えるものもあることを知った。自分でも家で何か使えそうなものを見つけたときは、日本館オンライン授業を思い出して手作りしたい。

それを「ごみだ」と思わないようになると、新たな発想をすれば、ごみはごみではなくなるのが分かった。自分でもごみ拾いやボランティア活動をしてみたいという気持ちになった。

ごみをごみにしないためにはどうしたら良いのか、あまり深く考えたことはなかったけれど、周りの人の意見や質問を聞いて、自分には思いつかなかった考えがたくさんあり、意外と再利用できるものも多いんだと気づいた。

授業のときに出た「もう一花咲かせる」という言葉と、「どうして大学生が私たちに授業をしてくれたのか」を話してくれたところがとても印象的だった。ペットボトルや段ボールをよく家で使うので、自分でも再利用のアイデアをやってみたい。

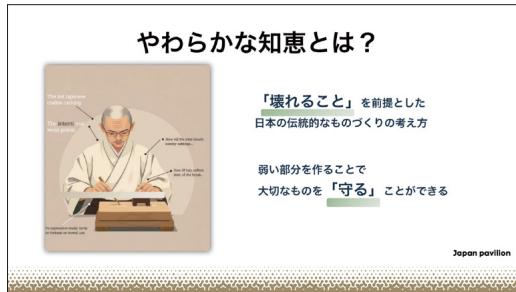
万博会場で発生したごみを水に変えるという循環を日本館で行っているという話をとても印象的だった。ごみを燃やさずに、水に変化させることが世界中に普及すれば、環境保全にもなるし、二酸化炭素の排出量も減らせるので、地球温暖化対策にもなると思った。

使い終わった人が、「もういらない」と興味を失うのではなく、「どうしたらまだ使うことができるのか」を考えて生活していくらいいんだと感じた。自分も、いらないと思った紙を折ってみたり、インテリアにしたりしていきたいと思う。

Group 4

やわらかA 「『やわらかい』は強い？」

レクチャー内容 Lecture



「やわらかな知恵とは何か？」と、あえて抽象的なままの謎めいた投げかけからテーマへの興味を促した



日本館の紹介パートも「やわらか」を軸に構成し、展示内の位置づけが分かりやすいよう工夫



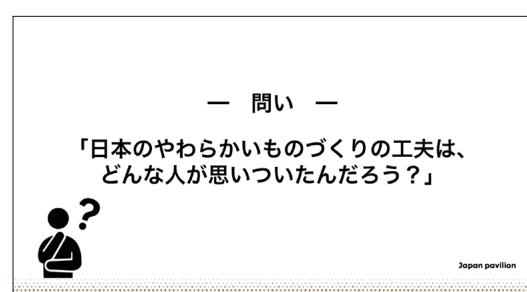
ホームミッションで整理した事例をもとに、「やわらか」の意味をテンポよくかみ砕いていく



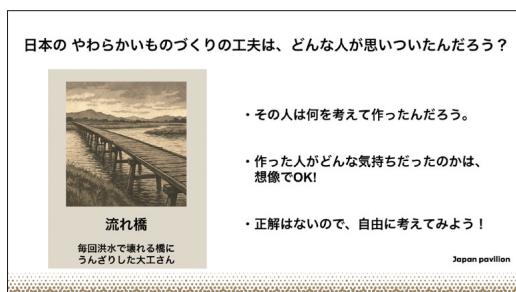
面白い気づきになるよう、身近なものの具体例を丁寧に解説



具体例でイメージを持ってもらった上で、「循環」の一部として「やわらか」の役割や定義も図解で伝えた



問いは、「やわらかなものづくり」が日本らしい知恵であることも伝えられる形で投げかけた



ヒントとして日本館でも紹介している「流れ橋」をここで紹介。中学生たちに考えてもらいたいよう構成した



「やわらかい」の意味や必要性について、気づきとともに楽しく理解できる授業として仕上げた

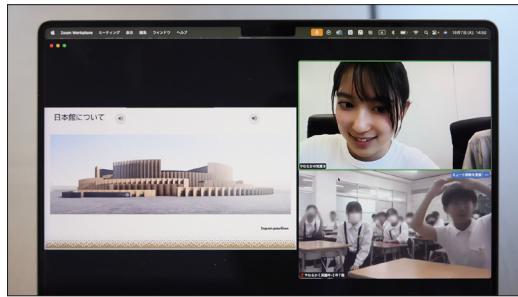
2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 4

やわらかB 「やわらかの知恵とは!?」

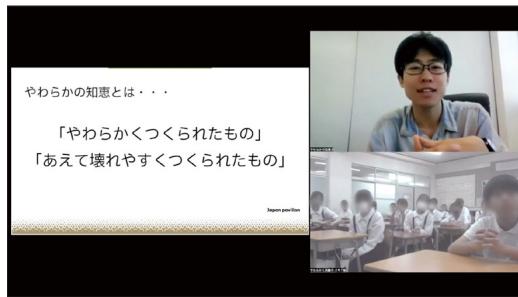
レクチャー内容 Lecture



日本館の展示について、中学生が知っている知識と結びつけながら「循環」との関連を解説



MCが流れを作りつつ、パートごとに担当を分けてそれぞれの個性も活かしながら授業をスムーズに進めた



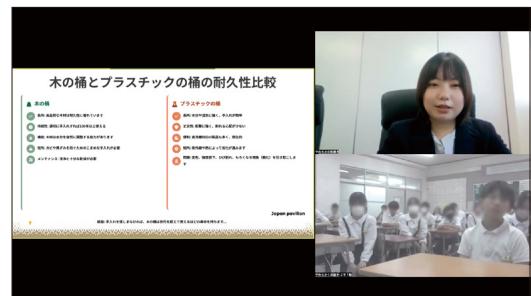
「やわらか」という抽象的なテーマは、「循環」についてイメージが湧いてきた段階で投げかける構成に



ホームミッションで収集した「やわらか」の具体例は、性質ごとに分類し、視覚的に分かりやすく解説



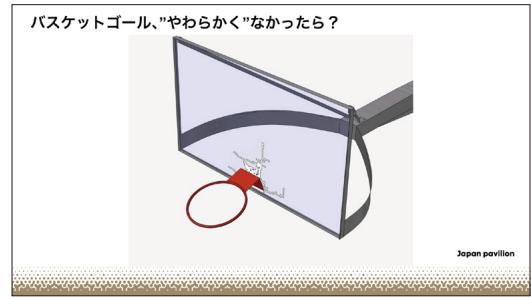
日本館で紹介している「桶」も解説。中学生が興味を持ちやすいようクイズ形式に



木とプラスチックの桶の耐久性比較やメリット・デメリットとともに、「やわらか」の長期的な利点を伝えた



問い合わせ、身近な例を考えやすい「学校の中」を切り口に。生徒はメガネケースやホウキなど実物とともに回答した



チームからも例を紹介。自分ごととして想像しやすい工夫を凝らし、「やわらか」の大切さを明快に伝える授業に

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 4

やわらかC 「循環社会の仕組みと、私たちにできること」

レクチャー内容
Lecture



日本館の展示内容をテーマごとに深掘りするパートから授業をスタート

キーワード①発酵

発酵 生ゴミをエネルギーに変える技術



バイオガス発電のしくみ

- 1 会場の生ゴミを集めます
- 2 微生物の力で発酵させます
- 3 メタンガスが発生します
- 4 ガスを燃やして電気を作ります

捨てるはずのものが新しいエネルギーに！ 【提供：経済産業省】 Japan pavilion

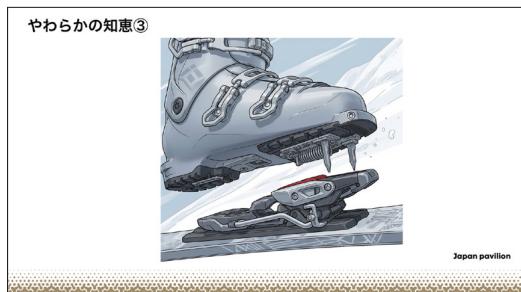
日本館の展示解説とともに、プロジェクトの4テーマについてもひとつずつ丁寧に解説した



「発酵」「循環」「もう一花」のテーマも説明した上で、「循環」の一部としての位置づけがより分かりやすいよう構成



ホームミッションで収集した「やわらか」の事例は、視覚的インパクトを工夫して興味を引きつける紹介に



ペットボトル、スキーキー、卵のパックなどを取り上げ、ひと目で分かりやすいビジュアルを工夫して解説

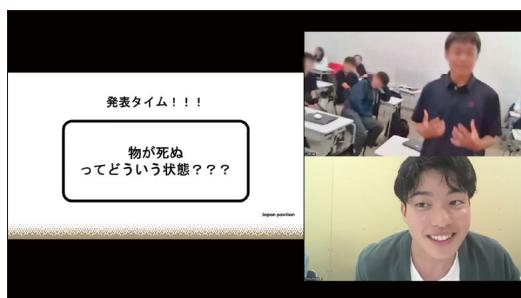
僕たちからみんなへの問い合わせ

物が死ぬ
ってどういう状態？？？



Japan pavilion

考えてみたくなるキャッチャーな質問から、やわらかの知恵のキーポイントを考えもらった



中学生からは「こわれたとき」「使い終わったとき」という答えが多数上がった

ありがとうございました！！

まとめ

“壊れる=無”ではない！
”変わら“ないために”変わる”

Japan pavilion

「目的を変えればものは生き返る」例などを伝え、授業全体で「こわれる」という概念を考え直す機会を作った

2-3 ジュニア世代ヘレクチャー

3-16 October, 2025

Group 4

やわらかなものづくり

大学生の声

Voices

日本館が伝えたい循環や、やわらかの知恵について、ちょっとでも考えてもらい、家族や友達とも話し合って、**習慣や行動を変えていくきっかけになってほしい。**反省点は、自分たちが伝えたいことに注力することで相手の状況などをあまり考えられていなかったこと。**もっと大きな視点で見ることの重要性を感じた。**

近畿大学 Kさん

自分たちの学びを分かりやすく伝えられた点が良かった。授業がきっかけで、実際にやわらかの知恵を取り入れたものを作る仕事に就くとか、その**考え方を柔軟に使いこなせる人になってもらえたうれしい。**自分の発想や行動に取り入れることで、あたらしい価値を生み出せるようになると思う。

関西大学 Sさん



用意していた台本の通りに、最後までやり切って伝えることができたのは良かった。中学生が質問に答えてくれなかつたり、軽い答えだつたりした場面もあったため、**もう少し深掘りをして接してあげられたらより良かつた**と思う。**循環について知恵を磨き、楽しんでもらえたらうれしい。**

関西大学 Yさん

問い合わせに対して、**想像していた以上に考えようとしてくれていたのが印象的だった。**独立しているように見えるものでも、実はどこかでつながっていて、循環していることを思い出してくれるうれしい。**ものでも、人でも、感情でも、つながりを意識しながら、周囲にあるものの意味を考えられると、広い視野でのごとを捉えられるようになる気がする。**

近畿大学 Mさん



中学生の声

Voices

「やわらかの知恵」と聞いたときには特別な印象を持つたけれど、**身の回りにもそれを活用したものがたくさんあることを知って、すごく驚いた**と同時に印象に残った。

何かものを作るときはひたすら硬くすればいいと思っていたけれど、今回の話を聞いて、**あえてこわれやすく作る**というのも手なのだな、と思った。この考え方を知って、硬度がすべてじゃないんだと気づかされた。

普通の人にはない発想でSDGsの取り組みを行っている例や、今まで**当たり前だった「不便」の視点を180度変えた考え方**の例を見て、参考になったし、憧れを感じた。学校のSDGsに関する授業で、この学びを活かしたいと思った。

「やわらかい」=ふにやふにやというイメージしかなかつたけれど、「やわらかい」は、**大切なものを守り、人々の負担を減らす技術**なのだと初めて知った。身の回りでも探してみて、周囲の人たちにも話したいと思った。

「こわれる」ことで「守る」という、やわらかの知恵は今まで自分になかった考え方だった。**身近にあるやわらかなものを探したいし、自分でも作り出せるようになりたい。**

「やわらかいは強い」という考え方を知った。今まで「やわらかい」は「もろい」ものだと思っていたから少し疑つたけれど、話を聞いてみて、**やわらかいものは普段私たちの日常を守ってくれていることが分かり**(スマホのカバーガラスなど)、感心した。

今までは、「なんでこんなにスマホのカバーガラスは割れやすいんだ」と思っていたが、それによってスマホが守られているということに驚きと関心を持った。**こんな機会でなければ「やわらか」のすごさを知ることがなかつた**と思うので、良かった。

やわらかい頭で発想することが大切だと分かった。ものごとを考えるときに違う立場に立ってみると、ということを心がけていきたいと思った。大学生の皆さん、「自分たちで考えて発表した授業だ」と話してくれたのが印象的。

おわりに

次のリレーは、 あなたから

日本館の理念から生まれたレガシーを、次の世代へ継承する。この目的のもとに始動した日本館レガシープロジェクトは、2025年8月から2カ月にわたって実施され、対話と共創を重ねながら、学びを未来へつなげるアクションに全員で取り組むものでした。

プロジェクトメンバーは大学生約50人、中学校4校の生徒たち。日本館のテーマである「循環」に深く触れる機会が必ずしも十分ではなかった大学生たちが、ともに悩み、成長し、理解を深め、得たものを次の世代に継承するまでを完遂した2カ月でもありました。

成果として特筆したいのは、「自分たちも『循環』の一部だ」という気づきの声がさまざまな場で上がったことです。身の回りの事例を探しながら、仲間と議論しながら、受け継がれる文化を感じながら。それは「循環」を自分ごととして理解できたからこそ実感であり、中学生たちにもその理解が伝えられていくさまが、レポートから見てとっていただけると思います。

大阪・関西万博は、テーマに「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げ、そのあり方を問いかけるものでした。技術やプロダクトだけでなく、視点やアイデアが世界から集まり、まさにレガシーの宝庫となりました。その中で日本館が伝えたかったものは、循環型社会の実現のための、日本が培ってきた知恵と技術、そして、一人ひとりの行動の重要性です。

本プロジェクトにおいても、知識の継承のみを目的とせず、メンバー自身が理解を深めるプロセスによってあららしい視点を持ち、行動につながる機会になることを大切にしました。いま、日本館の「循環」のバトンは、素晴らしい学生たちによって手渡され、それそれがまた新たな始点となって、広がっていくことでしょう。

そして本プロジェクトには、もうひとつ大切なバトンがあります。
メンバーがたどった行程を、誰もが体験できるようにまとめたワークシートです。学校で、家で、好きなときにこのバトンを受け取っていただければ幸いです。
日本館で生まれた気づきや問い合わせを受け取り、自分の中で生まれた言葉で誰かに伝え、一人ひとりの行動へと広げていく。そのとき、本プロジェクト、そして日本館そのものも、「おわり」ではなく「はじまり」となるのだと思います。
皆さんと作るこのリレーが、未来への力となることを、私たちは願っています。

Legacy Project Report

日本館レガシープロジェクトレポート

発行 令和8年2月

監修
塩瀬 隆之

企画・発行
経済産業省

企画・編集
公益社団法人2025年日本国際博覧会協会

企画・制作
株式会社日本デザインセンター